

キタのまちのニュースレター

「ローズミュージックフェスティバル」お茶席 大阪府立桜和高等学校 茶道部 インタビュー

恒例、ローズミュージックフェスティバル（以下、ローズ）は桜和高等学校、金蘭会高等学校・中学校によるコラボ演奏会で、当日は桜和高校茶道部の「お茶席」も恒例です。同校は大川がカーブする扇上に位置し、付近の旧・淀川（大川）には秀吉のお茶会と縁深い青湾せいわんがあります。今回、歴史と現代が交差するその茶道部に顧問の小島先生、表千家茶道教授・河西先生、部長・高鳥さん、男性部員・山條さんを訪ねました。（ローズは12月開催予定/詳報次号）

—まずはじめにお二人が茶道を始めたきっかけは？

高鳥さん 「お抹茶が好きだったのと、小さい頃からお花や着物といった和の文化が好きだったので興味があったんです。なので中学から茶道部に入っています」

山條さん 「僕は中学の頃はサッカー部に入っていました。でも実は運動があんまり得意じゃなくて…。高校では別の部活に入ろうと思っていた時に、学校の説明会で茶道部を知って、面白そうだと思い入部しました」

—そんなお二人は昨年のローズが、初めて学外の人にお点前を披露した時だったそうですが、どんな感想を抱かれましたか。

高鳥さん 「すごく緊張したし、美味しくできるか不安もありました。でも、最後にお客様から“上手だったよ”って声をかけてもらえて自信ができました」

山條さん 「自分のときは親が来てくれたんです。帰って感想を聞いたら“美味しかった”って言ってきて、お茶に詳しくない人にも美味しさを伝えられたと思うと嬉しかったです」

河西先生 「みんなお点前が上手だから、お抹茶も美味しいですよ。それにただ点てるだけでなく、相手を思って点てているんだと思います。二人ともホッとのお茶を点てるんですよ」

小島先生 「普段は文化祭が初めて披露する場なんですけど、コロナでそれもなくなっていました。ローズの時に人前で披露するという目標ができて、前向きに取り組めたので、みんな半年ほどですごく成長しました」

お茶席で飾られている花や掛け軸、茶器にいたるまで、

すべてが相手に楽しんでもらうための気遣いが込められていると言います。茶道を学んでいく中で、自然と思いやる心が生まれ、お点前にも表れているのかもしれない。

—それでは最後に今年のローズに対する意気込みをお願いします！

高鳥さん 「いろいろなお話をしたいです。そして、お茶席をきっかけに茶道に興味を持ってもらえたらいいと思います」

山條さん 「小さい子からご年配の方まで楽しんでいただいて、『これ高校生がやったの！』と驚いてもらえるよう頑張ります（笑）」

小島先生 「みんな心を込めてお茶を点てさせていただくので、ぜひいっぶく召し上がっていただきたいです」

河西先生 「この子たちがお客様を思いやる姿を見て、お茶をいただいた時に“心が美味しいな”というのを感じていただきたいです」

今年からは後輩も入ってきて、ますます成長していくであろうお二人。今年のローズではどんなお点前を披露していただけるのか、ローズの際は来館して、ぜひ堪能してみてください。



未来の私をつくるのは、いま。 ヨガでエイジングビューティ！

ヨーガ講習会 講師 北野 富佐子

日本体育大学の「集団行動」という団体スポーツをご存知でしょうか？ 何十人という男女混合の学生たちが、整列を乱さず行進やかけ足、斜めに交差したり、後ろに進んだり…縦横無尽に形を変える究極の行進パフォーマンスです。息の合った一糸乱れぬ動き。シンプルがゆえに、皆の魂が呼応し昇華されていく高難度な演技は、観る者を圧倒し、国内外で高く評価されています。一体、どれほどの鍛錬を積み重ねてきたのでしょうか。

「息が合う」ことで生まれる。

穏やかな安定感と波のようなパワー。

コロナ禍のマスク生活は、仲間と息を合わせて楽しむ毎日、そして、自分自身と息が合う暮らしを奪っていきました。「やる気はあるけど、あちこち痛くて」「体調は万全なのに、気持ち前を向かない」心と身体の不協和音を感じてはいませんか？

『息』は、自分の心と書きます。心のありようを表す呼吸を、ゆったり穏やかに。ヨガは様々なポーズを通して、身体の歪みや左右差に気づき、少しずつ改善していきます。筋肉が柔軟に、骨格が正常に整ってくると、肩や腰の不調が和らぎ、血行が良くなり、情緒も安定。さらに呼吸も深まってくる好循環が生まれます。ヨガで培った心身の安定は、お隣さんへ、ご家族へ、職場へ、地域へ…優しい空気となって波及していくでしょう。呼吸が心と身体を繋いでいくことで、充実した毎日を送ることを目標にしています。

くらべない・がんばらない・あきらめないをモットーに、解剖学に基づいた正しい骨格の動かし方、筋肉の柔軟性と強さのバランス、四季に呼応した身体のケア法…さまざまな視点から、クラスを構成しています。

まずは、マットに座る。呼吸の波に合わせて手足を伸ばしてみる。全身にみずみずしい酸素が巡り、こわばっていた身体と心が開いてくるのを感じるでしょう。ポーズの完成度は二の次、三の次(笑) 50人いたら、50のポーズと笑顔が並びます。いまの私は、過去の結果。未来の私は、いまの結果です。5年後、10年後「息の合った私」でいるために、いまを大切に。ヨガで楽しくエイジングビューティ、始めましょう。



大阪人のコミュニケーション

建築家・ツキイチ屋台女将 岸上 純子

前回、地域コミュニティはちょっと面倒だけど、防災の観点においても大切ですよという話をしました。そうはいってもコミュニティって難しそう…と思う人も多いのでは？

かくいう私も「京都だったら難しかったかな」って話を京都精華大学学長のウスビ・サコ先生から聞きました。例えばあなたが家でパーティー。するとご近所の方が「にぎやかでよろしいね」「あなたが来てから、このあたりがにぎやかになりました」と声をかけしてくれました。あなたなら、こう言われたらどう思いますか？

私だったら「はい、にぎやかに楽しくさせてもらってます！」って返事してしまうでしょう。大阪ならOK。でも、京都では「にぎやかでよろしいね＝うるさくて迷惑です」なんだそうです。

他にも、京都人の遠回しな表現の難しさをおもしろおかしく書かれた、サコ先生の著書『ウスビ・サコのまだ空気読めません』『アフリカ人学長、京都修行中』なんかを読んでみてください。京都人のおだやかな口調に込められたNGサイン、暗黙のルールの難しさを感じますし、それを知らないと大変なことになるんだなと実感できます。

もう一つ、サコ先生に聞いて驚いたことがありました。私は大阪人ですが、親からは「家の前の掃き掃除をする時は向こう3軒くらいまでしなさい」と教えられました。けれど、京都ではそれがNGなんだそうです。お隣の前も掃くと「あなたの家は汚いですね」というサインになってしまうからだそうです…ああ難し。

世の中にはその土地土地のルールがあります。それは世界も同じです。先日、吹田の「民博」に行った時、エチオピアの食とコミュニケーションの展示を見つけました。食事をする場に出くわすと「インネプラ！＝さぁ一緒に食べよう！の意」と誘われるそうですが、声をかけられてもこの誘いに乗ってはいけません。なんらかの建前を述べ、断るのが美徳なんだそうです。ちょっと京都と似てますね。こういった遠回しのコミュニケーションルールは本当に難しいなと感じます。

でも、大阪はハッキリが持ち味です。時々キツく感じることもあるかもしれませんが、本音でわかりやすい。怒られたら誠意を込め謝ればいいし、褒められたら素直に喜んでいいのです。大阪人でよかったです！



キタ歩き日本旅

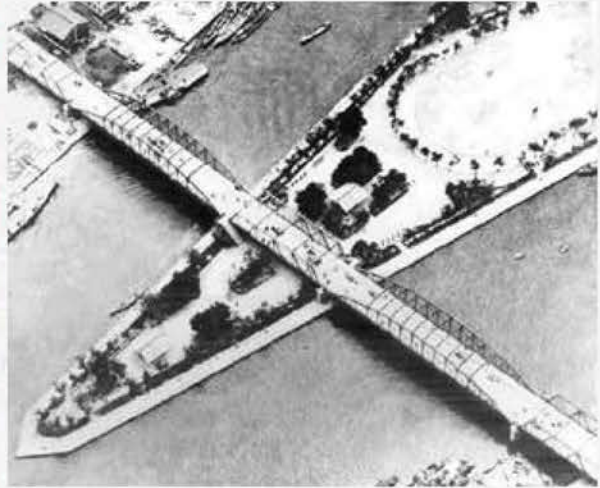


福岡県
の巻

「大阪駅前ビル」には、47都道府県のうち約半数にもなる日本全国の「道府県事務所」がオフィスを構えています。少し大きさに表現すると『日本が大阪駅前ビルに勢ぞろい!』の風情です。SNS万能の時代ですが、全国各地の旅や物産の様子が「人肌感覚」で知ることができます。この連載は、旅する感覚で北区の大阪駅前ビルを訪ね教えていただいた情報です。大阪駅前ビルの歴史も魅力的!「わが町の旅」としていかがでしょうか。



ブランド・イカ「一本槍」写真提供:福岡県大阪事務所



中之島東端「剣先」(中之島まちみらい協議会HPより転載:大阪市立図書館収蔵)

九州・沖縄各県を巡ってきましたが今回は福岡県大阪事務所に田中さんを訪ねました。そこで開口一番、こんなお話が……。

NHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」は2014年に放映されました。福岡の町を築いたと称される黒田官兵衛が所有していた槍に「日本号」という天下の名槍があります。この名槍・日本号にあやかり、福岡・筑前海漁師が釣り上げた高品質のヤリイカ・ケンサキイカを「一本槍」と名付けブランド化しています。「酒は～飲めえ～飲め～」で有名な黒田節の「この槍」とは日本号のことです。

豊臣家臣、天才軍師・官兵衛と猛将・福島正則が「飲み比べ」た「あの槍」ですか？

そうです! 天下の名槍・日本号はこの逸話にちなみ「呑み取りの槍」とも呼び、福岡市博物館に常時展示しています。イカの「一本槍」は夏のケンサキ、秋から冬にかけてはヤリの旬。ただし「この透明感・この食感」はとれたてすぐの「活け」

だけのもので、福岡までお越しいただかないと体験することができません。

「イカは白い」と思っていたのですが、こんなに透き通っているんですね。

そうなんです。「一本槍」は素晴らしいイカですし、そのいわれの「日本号」には、より深い「大阪つながり」があるような気がします。

じつは、大阪の象徴的な場所、北区中之島。その東端がまさに「ケンサキ」なんです。すぐさま「中之島・剣先」を思い浮かべました。

それは面白いですね～～～! 中之島に「剣先」があるとは知りませんでした。

後日、調べてみると……大阪歴史博物館 研究紀要 第13号 文献資料からみた豊臣前期大坂城の武家屋敷・武家地(大澤研一氏による)3ページ(表1 先行研究にみる武家屋敷の所在地)に、次の記述があります。黒田考高・長政/場所・天満/出典2・櫻井1970/備考・二町南に近世の東照宮(抜粋)……ここで

は、櫻井成廣という方の「豊臣秀吉の居城 大阪城編」の研究から「明らかにした」と記されています。孝高は官兵衛、長政は嫡男。ここの「天満」は造幣局北側で、「二町南に近世の東照宮」は造幣局西隣り「大阪市立滝川小学校」付近です。

えっ、大阪に「黒田の屋敷」があったんですか。それはまったく知りませんでした。「日本号」や「一本槍」とも、やはり遠からぬご縁があったんですね!……私も訪ねてみます。大阪の皆様には、ぜひ現地で「日本号」「一本槍」を体験してみてください。

(次号から「北から南へ」県事務所を訪ねます)



天下の名槍「日本号」

写真提供:福岡県大阪事務所

浪花百景歳時記

大阪大学総合学術博物館
研究支援推進員

波瀬山祥子

桜はどこどこじゃ、どこどこじゃ

第四六景 堀川備前陣家 芳雪画

上方落語「へっつい盗人」は友人の新居祝いに、道具屋から「へっついかまど」を盗む話です。「見付かったらえらい目に遭わんらん」と尻込みする清八に、「そうなたら、うっとこのおっさんの別荘に行ったらええ」と喜六は答えます。別荘とは豪勢な。天満堀川にあったのですが、最近、堺に引越

して壁が高いレンガ造りの立派な洋館になったそうで……。お気づきでしょうか、おっさんの別荘とは監獄のことです。

現在扇町公園となっている場所に監獄が置かれたのは、明治十五年（一八八二）のこと。市の発展に伴って、街の中に広大な監獄があるのはふさわしくないという声が高まり大正九年（一九二〇）堺市へ移り、元の土地は大阪市へ払い下げられました。

本図はそれより遡って幕末の天満堀川沿いの



春景。天満堀川（現・北区扇町）は、戦国時代に堂島川から北へ向かって扇町公園付近まで開削され、天保九年（一八三八）に北東方向に延長されて大川につながりました。現在、川の跡は地下を通って扇町まで抜けるバイパス、その上が阪神高速の守口線となっています。

文久元年（一八六一）、外国からの通商・開港要請を背景に、大阪湾周辺の警備を命じられた岡山藩が、扇町公園の場所に駐屯地を構えました。絵の奥に見える立派な高灯籠が目を引きま

す。しかし、画面には幕末の危機迫る緊張感はなく、桜が咲き誇るのどかな春の陽気に包まれています。右下に流れるのが天満堀川で、土手沿いには満開の桜の木が並び、人々が花見を楽しんでいるようです。笠を被り尺八を吹く人物もいます。土手の突き当たりを右に折れ、さらに川をさかのぼると樋之口から桜花爛漫と咲き誇る桜宮の対岸に出ます。馬に乗る武士も陣屋に向かってい

るのでお花見でしょうか。

左側に木の幹を置き、枝を画面の上部から降ろす構図は、『浪花百景』の第八〇景「御勝山」にもみられる芳雪の得意技ですが、全体の構図を、歌川広重の『富士三十六景』「武蔵小金井」から転用しています。桜並木の中にある由緒ありげな霧困気が漂う大きな穴の空いた古木も、そっくりに広重画を写したものです。ですが、芳雪は巨匠の絵をうまく自分の画域に取り込んで、広重画の富士山を高灯籠へ描き変えて、新たな一図を生み出しました。

編集後記

筆者が取材に行った際、茶道部員のお二人はお茶を点てている最中でした。その姿を見て、「丁寧におもてなししよう」という意気込みが、所作から伝わってきたのが印象的でした。ありがたいことにお茶を立てていただけることになり、一口いただくと抹茶の苦味の中にまろやかな甘さがあり、どこかホッとする気持ちに。美味しいお茶を心地よくいただいた時、心の底から湧き上がる満足感…「これが“心が美味しい”瞬間か！」と実感した次第です。

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室

■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会

■発行月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター 〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27
☒ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp

大淀コミュニティセンター 〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
☒ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp